

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第927号 平成27年5月11日

パンツの洗礼

朝日新聞の日曜版に「オトナになった女子たちへ」というコラムが連載されています。

執筆しているのは、漫画家でエッセイストの益田ミリ氏、芸能事務所社長の太田光代氏、そして漫画家の伊藤理佐氏の3人で、彼女達がそれぞれリレーする形で連載しているものです。

さて、3月29日には伊藤理佐氏が「パンツの洗礼—オンナへの道」と題して次の一文を掲載しています。

むかしむかし、長野県に女子高校生がいました。夜、女子高校生は居間で寝転がってテレビを見ていました。その横でお母さんが洗濯物を部屋干ししています。朝、そのまま外に出すだけにしておきたいのです。ちょうどその女子高校生のパンツのシワをパンパンッとのばしていた時、お母さんは聞きました。

「あのさ、干しているのあなたのパンツなんだけど。手伝おうとか思わない？」女子高校生はテレビを見たまま言いました。「洗濯はお母さんの仕事デシヨ」。お母さんは絶句したままパンツを干しましたとさ。おしまい。

(以下略)

塾頭通信で女性のパンツの話というのはいささかひんしゅく 髒 髒 ものかも知れませんが、子どもの自立を考えるという点でなかなか面白いテーマだと思い、取り上げる事にしました。

ところで、紹介した一文に登場する女子高校生は、誰あろう伊藤氏自身です。

今や紛れもなくアラフォーとなった伊藤氏は、「何度思い出してもため息が出るのだけれど、残念な事にこの女子高校生は私です」と述べています。そして、「自分のことながら、せめて少し手洗いしてから洗濯に出すとか、そういうアレがなかったのか？なかったんだな……」と述懐し、タイムマシンがあったら自分をブッ飛ばしに行きたいとも述べています。

ある飲み会での事、男性編集者が伊藤氏に対し、自分の娘について「女の子パンツは手洗いしてソッとどこかに干すものじゃないんでしょうか？つーか、洗わせて恥ずかしくないんでしょうか？」といい難そうに相談して来たそうです。

それに対して伊藤氏は何といったか。「女子中高校生の女子なんて、そんなもんです！」

彼女は、昔の自分を必死で擁護したい気持ちだったようですが、「自分のパンツがどうやってキレイになるか考えない、それが若さですよ！」という一言には、私も、妙に納得します。

「自分のパンツがどうやってキレイになるか考えない」というのは、女子も男子も同じです。私だってそうでした。勿論、今はちゃんと分かっています。しかし、分かっているはずですが、妻が洗濯してくれているのを至極当たり前のように振る舞っている訳で、先程の女子高校生と五十歩百歩じゃないかと、実は反省しています。

最近、料理も洗濯も得意という若い男子が増えていると聞きます。これはその男子の性格や好みもあるのだとは思いますが、家庭環境の影響も大きいと思います。小さな時から、出来る限り身の回りの事は自分で出来るように仕向けて行く事は、その子の自立を促して行く上でも重要だと思えます。

一方で、相手のパンツを洗うというのは、それだけ相手と自分との距離が近いという事であり、愛情表現の一つともいえますので、「自分のパンツは、一人で生活を始めたら嫌でも洗わなければならなくなるのだから、親元にいる間は洗ってやりたい」と考える親の気持ちも分かりますし、実際、娘のパンツを洗っている母親の方が圧倒的に多いと思えます。

伊藤氏も東京都が何処にあるか知らないまま上京して、4畳半で自分のパンツを初めて洗ったと述べているように、一人で生活すれば、誰だって自分で洗濯するようになります。私もそうでした。

とはいえ、少なくとも、自分のパンツをだまって洗ってくれる事に感謝の思いを伝えられる子には育てるべきではないでしょうか。

(塾頭：吉田 洋一)